

## 「日本文化」の文化論と文化史

## ——日本研究の推移——

成田龍一

はじめに——「日本文化論」と「日本文化史」

奇妙なタイトルをつけたが、「日本研究の過去・現在・未来」を考察するにあたり、日本文化研究の歴史的な推移を主題とすることにした。日本文化研究の歴史的な考察といったとき、一九八〇年代に「日本論」「日本人論」として日本文化論の大きなうねりがみられた。それまでにいくつものうねりがあったなか、この一九八〇年代の議論・研究の特徴は、こうした「文化論」の活況とともに、あらたな「文化史」の主張が胎動してきたことにある。日本文化研究というとき、ばくぜんと包括されていた日本論・日本文化史において、「論」と「歴史」があらためて分節化される動きが見えてき

ていたということである。

その後、一九九〇年代中ごろには、これまでメディア論の一分野であったカルチュラル・スタディーズ（CS）が文化研究の文脈で提唱され、日本を対象化し、日本文化論を批判する動きが登場した。しかし、二〇一〇年代半ばの（いま）は、あらたに保守派の論客への関心がつよまり、江藤淳や福田恆存、あるいは山本七平、竹山道雄らの議論に注目が集まっている。「戦後」という枠組みの爛熟や崩壊と併行した、保守派を中心にした日本と文化認識のもとでの様相ということができよう。

本稿はこうした認識のもと、戦後における日本文化の歴史研究のいくつかの局面に着目し、その素描を図る。まずは一九八〇年代以降の特徴として、A「文化」に力点を置くものと、B「歴史」に比

重を置く日本文化研究の二つが併存していることを入り口としてみよう。

一九八〇年代の動きをうけた、対照的な二つのシリーズがある。A『近代日本文化論』（全十一巻、一九九九〜二〇〇〇年。編集委員 青木保・川本三郎・筒井清忠・御厨貴・山折哲雄）と、B『近代日本の文化史』（全十巻＋別巻、二〇〇一年）。別巻のみ未刊。編集委員 小森陽一・酒井直樹・島蘭進・千野香織・成田龍一・吉見俊哉）である。ともに岩波書店から刊行され、近代日本を対象とするが、それぞれ「文化論」と「文化史」をシリーズの表題としており、その構えも執筆者も大きく異なっている。

シリーズの巻別構成は、前者Aが「近代日本への視角」、「日本人の自己認識」、「ハイカルチャー」、「知識人」、「都市文化」、「犯罪と風俗」、「大衆文化とマスメディア」、「女の文化」、「宗教と生活」、「戦争と軍隊」、「愛と苦難」。

他方、後者Bは、「近代世界の形成」（一九世紀世界Ⅰ）、「コスモロジーの「近世」」（一九世紀世界Ⅱ）、「近代知の成立」（二八七〇―一九一〇年代Ⅰ）、「感性の近代」（二八七〇―一九一〇年代Ⅱ）、「編成されるナショナリズム」（一九二〇―三〇年代Ⅰ）、「拡大するモダニティ」（一九二〇―三〇年代Ⅱ）、「総力戦下の知と制度」（一九三五―五五年Ⅰ）、「感情・記憶・戦争」（一九三五―五五年Ⅱ）、「冷戦体

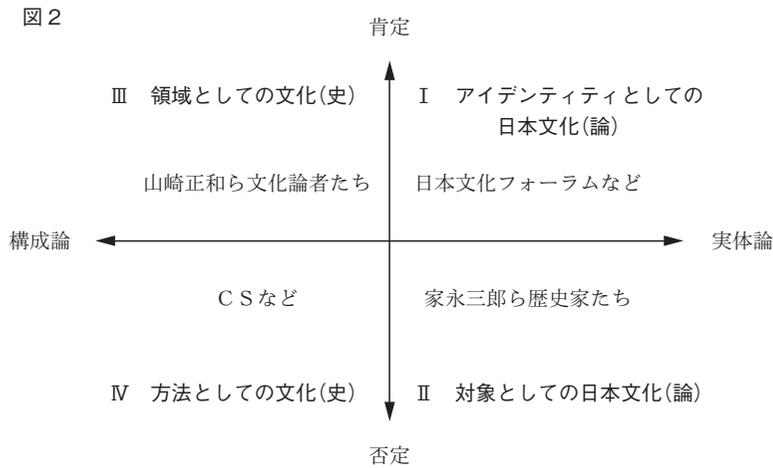
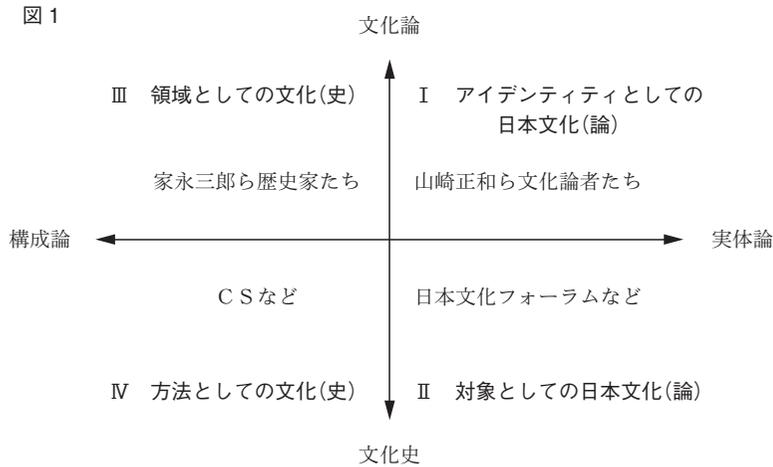
制と資本の文化」（一九五五年以後Ⅰ）、「問われる歴史と主体」（一九五五年以後Ⅱ）となっている。

前者Aがテーマ別の編成であるのに対し、後者Bは通時的に論を立てているが、それ以上に文化と歴史への向き合い方が双方で異なり、問題の把握と評価、論の組み立ても異なっている。

とともに、①それぞれは、それぞれに時間における変化・推移を組み込み（文化を）歴史の時間のなかで論じると同時に、②シリーズ名にともに「文化」を掲げ、焦点としている。このとき、AとBとの差異は明瞭で、①にかかわっては、Aは素朴な時間的な流れを歴史とみなすのに対し、Bは歴史を構成的なものとし、そのことを議論の核心においている。また、②にかかわり、Aは文化を領域的なものと把握するのに対し、Bは（歴史に接近するための）方法として文化をもちだしている。

本稿の主題である日本研究にかかわっていえば、Aが日本・日本文化を自明のものとし、それをテーマへと分節するのに対し、Bは日本・日本文化が自明とみえてしまうカラクリこそを問題化している。そして構成的な日本・日本文化の概念が、あらためて近代のなかで、どのような画期をもち、どのようにそれぞれの時期で「日本なるもの」「日本文化なるもの」が創りあげられたかを考察する。

AもBも学知における言論的転回をみてとっているが、Aはそれに距離を置き、その認識に懐疑的であるのに対し、Bは逆に、言語



論的転回を歴史分析に導入しようとしている。すなわち、AとBとの対比において、いまひとつの軸となる「日本」の実体化と構成性である。ポストモダンの流れと違ってよいが、Bは言語論的転回を伴いながら、日本は構成的に再構成されたことを議論の出発点にお

く。日本文化研究において、対象である日本、あるいは文化、歴史に、「実体—構成」という軸が生じる。日本文化研究を、文化論と文化史、実体論と構成論を軸とし図示するとき、図1のようになる。日本文化研究は、四つの象限（I II III IV）をもつが、各象限において、それぞれが別個の問題意識、分析のための概念と範疇を有し、互いに交錯しない状況がみられるということである。これまでみてきたA日本文化論は、I「アイデンティティとしての日本文化（論）」と、II「対象としての日本文化（論）」に位置づけられ、B日本文化史は、III「領域としての文化（史）」（しばしば、部門史となる）と、IV「方法としての文化（史）」（全体史への志向）をもつ。I—IVが近接し、他方、II—IIIが近接することになる。

また、AとBは、日本文化への批判的な議論と、日本文化を礼賛し肯定する議論として、評価が分離する。その評価軸を組み込み、いまいちど図示す

れば、図2のようになる。

まずはAに焦点をあてながら、課題に接近してみよう。<sup>1)</sup>

一 「日本文化論」の推移をめぐって

(1)

「日本文化論」(A)と「日本文化史」(B)のうち、推移系譜が論じられてきたのは、もっぱら前者Aの日本文化論である。日本文化論の軌跡は、それ自身が(日本文化論にとっての)アイデンティティをなしてきた、ということになる。日本文化論は、先行する日本文化論の研究に言及し、その範疇を論じることをひとつの作法としている。日本文化論が、アイデンティティ論となつていくことのひとつの証左である。

日本文化論の推移の考察といったとき、軸をなすのは、したがって、もっぱらAの立場と方法である。代表的な作品として、青木保『『日本文化論』の変容』(中央公論社、一九九〇年)、南博『日本人論の系譜』(講談社、一九八〇年)、『日本人論』(岩波書店、一九九四年)、船曳健夫『『日本人論』再考』(日本放送出版協会、二〇〇三年)などを挙げうるが、もつともはつきり時期区分をするのは青木である。

青木は、一九九〇年の時点で「戦後日本の文化とアイデンティ

ティー」を問うことを試み、四つの時期を提出している。「否定的特殊性」(一九四五―五四年)、「歴史的相対性」(一九五五―六三年)、「肯定的特殊性」(前期一九六四―七六年、後期一九七七―八三年)、「特殊から普遍へ」(一九八四年―)として、肯定/否定と、特殊/普通の軸で日本をめぐる議論を整理する。型の抽出と通時的な推移を組みあわせており、日本文化論の文化論的整理として受容することができると言える。

「外部」の眼」の存在を強調した時期区分というが、ルース・ベネディクト『菊と刀』を冒頭において展開される青木の議論は、戦後の展開を意識している。政治史的な動きとして、敗戦―五五年体制―冷戦体制―新冷戦体制、あるいは経済的な進展として、復興―高度成長―安定成長―バブルという動きのなかでの議論となる。挙げられる文献も「ホーリスティックな日本についての論考」で「大きな話題」「傾向を変えるような影響力」をもつものであり、開かれた議論となつている。

だが、ここには図2に記した、「肯定―否定」が軸とされるものの、「実体―構成」の軸はない。青木が「肯定的特殊性」とする時期の後半には、モダニティの再考がなされ、「日本」の自明性が組上に載せられ、そのうえで考察が登場する時期であつたのだが、この点に関心は示していない。

他方、Bの観点からの日本文化論の考察は少ない。そのなかで、

鹿野政直「日本文化論の歴史」(『史学雑誌』第八七編第三号、一九七八年)、『鳥島』は入っているか(岩波書店、一九八八年)、西川長夫『国境の越え方』(筑摩書房、一九九二年)などが、文化史の立場(B)から日本文化論(A)の検討をおこなっている。

鹿野は、日本文化論が唱えられた七つ(一九八〇年代を含めると八つ)の時期を設定し、「文明開化期」(一八七〇年代)、「国粋主義期」(一八九〇年代前半)、「帝国主義突入期」(一九一〇年前後)、「ファシズム化期」(一九三〇年代)、「戦後出発期」(一九四〇年代後半―五〇年代前半)、「新安保体制期」(一九六〇年代)、「七〇年安保以後期」、そして一九八〇年代の時期を指摘する。日本文化論がさかんであった時期とそうでなかった時期を見渡し、日本文化論の隆盛は、①「大衆運動」と反比例し、②「知識人」と「大衆」(知識人優位)という論点がみられるとした。

本稿で対象とする戦後については三つの時期が指摘され、背後にアメリカとの関係を有する社会運動に基づいた時期区分をおこなっている。鹿野は、日本文化論をひとつのイデオロギーとして把握し、そのゆえに経済ではなく、政治、それも社会運動との関連で考察する。日本文化論それ自体に批判的なまなざしをもち、接していくのである。

しかし、ここでも「実体―構成」の軸は見られないうえ、ともにそれぞれの時期の代表的な論を取り上げ、その特徴を指摘するとい

う手法をもつ。A、Bとして挙げた双方の議論には相当の距離があるが、分析の手法や叙述の作法は類似している。

加えて、着目する作品も接近している。たとえば双方とも、加藤周一「日本文化の雑種性」(『思想』第三七二号、一九五五年)や梅棹忠夫「文明の生態史観」(『中央公論』一九五七年二月)をひとつの節目の著作とし、加藤・梅棹が「西欧対日本」との関心で近代日本を議論していることを指摘する。そして、そのことの自己認識と自己評価として日本文化研究がなされてきた、という把握がなされる。

A、Bともに、①近代の価値化―それを鏡とする日本文化研究を抽出し、それらが②「封建遺制論」を下敷きにしていたことが一九七〇年ころまでの主調音をなしたとしている。

ちなみに、A文化論からの日本文化論・日本文化史として、一九七〇年ころまで参照されてきたいくつかを列挙すれば、『思想の科学』グループ(鶴見俊輔、鶴見和子、南博、佐藤忠男ら)、政治思想・政治思想史(丸山眞男、藤田省三、橋川文三、神島二郎ら)、文化の社会学(見田宗介、栗原彬、作田啓一ら)、文学史研究(前田愛、亀井秀雄ら)、社会批評(吉本隆明、谷川雁、花崎皋平ら、また山崎正和ら)、民俗学(谷川健一、宮田登ら)、文化人類学(山口昌男、川田順造ら)、教育学(中内敏夫ら、また天野郁夫、竹内洋ら)、差別批判(金達寿、尹建次ら)などの領域からの議論と作品を挙げうる。

他方、これらに反発し、批判する議論も出されていた。日本文化

論として提供されたものは、イザヤ・ペンダサン（山本七平）『日本人』とユダヤ人』（山本書店、一九七〇年）と土居健郎『甘えの構造』（弘文堂、一九七一年）、山本七平『空気』の研究』（文藝春秋社、一九七七年）などである。いずれも、近代化論的な視点に立つといえよう。

(2)

日本論・日本文化論の磁場は、一九八〇年代を通じて大きく動く。一九七〇年代と一九八〇年代の差異は、批判的・日本文化論と肯定的・日本文化論が、「日本」「文化」論となつてあらわれてくることにある。文化論として日本を扱い、日本文化を論ずるのではなく、文化の一形態、すなわちケーススタディとして日本を扱う研究の登場である。あるいは構成的な立場からの日本論・日本文化論の出現といつてもよい。

加えて、日本文化を論ずることが、そのまま日本文化の自讃に連なることもつばらであつたなか、批判的な日本文化論が少なからずみられるようになる。

背景にあるのは、高度成長にともなう日本経済の爛熟である。そのことにより、かつての封建遺制論―日本近代の歪みや遅れという議論が姿を消していくのは青木の指摘の通りであろう。

こうしたさまざまな動きを象徴するひとつが、田中康夫『なんと

なく、クリスタル』（河出書房新社、一九八一年）の登場である、と私は考えている。唐突な感をあたえるかもしれないが、この小説を日本論として考察するとき、これまでの日本論とは大きく異なる面が浮上する。

田中が見ずえるのは、東京の原宿、六本木、広尾、青山といったモダニティの尖端の場所であり、そこにおける料理やブランド品などのモノである。また、学生でありつつモデルをするような女性たちが創りだす人間関係である。

農村に出自をもつものたちの感性や関係から遠くへだたつたモダン日本を、田中は切り取り小説として送り出した。興味深いことは、この小説が多くの批判を浴び、田中が描き出す消費に着目した日本が批判されるなか、保守派の江藤淳が田中の『なんとなく、クリスタル』を絶賛したことである。

一見すれば不可解なこの関係について、加藤典洋『アメリカの影』（河出書房新社、一九八五年）は、高度成長期におけるアメリカからの「影響」や「圧迫」――すなわち、憧れと反発という相反するアメリカへの感情を見出しつつ、戦後論として論じた。加藤は、江藤による田中評価を、アメリカを補助線として読み解くのである。加藤の議論は、背景に戦後論を踏まえており論旨はそこに比重があるが、日本論としては、日本の自意識の背後に「アメリカの影」を指摘したということになる。

日本論・日本文化論の背後にあるアメリカとの関係。加藤の指摘によって、一九八〇年代以降の日本をめぐる議論は「アメリカの影」の存在が欠かせない視点となった。

また、一九八〇年代には、保守派の日本論として、村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎『文明としてのイエ社会』（中央公論社、一九七九年）、および、山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』（中央公論社、一九八四年）を見逃すことができない。さきの青木は『文明としてのイエ社会』を「広い文明史的展望に立つてとらえられた」「日本近代化論」とし、「肯定的特殊性」の総括をおこなっているとした。『文明としてのイエ社会』は「間柄主義」をもちだし、「日本の近代化の特性の分析」として日本の「多系論的發展」を欧米の「一系論的發展」と対置したとされるのである。日本社会の位置付けを逆転し、今後の進展のための可能性をもつ「社会原理」と評価したと青木はいい、日本文化論の「黄金時代」の著作として位置づけた。

この時期、日本文化に肯定的でありつつ、しかしその特徴を「特殊性」として把握しない論者も登場する。山崎正和は、脱産業化の大きな流れで日本文化の現況を把握し、次のように唱えた。

われわれが予兆を見つつある変化は、ひと言でいへば、より柔らかで、小規模な単位からなる組織の台頭であり、いひかへれ

ば、抽象的な組織のシステムよりも、個人の顔の見える人間関係が重視される社会の到来である。（『柔らかな個人主義の誕生』）

山崎は、これまでの「硬い戦闘的な生産組織」「隣人の顔の見えない大衆社会」からの変化をいい、あらたな「人間的集団」——あらたな共同体——組織の登場の予感をいう。国家主導の時代が終わり、地域の時代となりゆく現状を「脱産業化」として普遍的に把握する。また、「生産」にかわり「消費」が意味をもちはじめていることを、（当然、日本に固有なものではなく）普遍的な文脈で指摘する。山崎は「個人」に着目し、「禁欲」から、（欲望を）「解放」する「個人」を肯定的に評価する。「集団」の時代から、「個人」の時代という把握であるが、こうした動向を、山崎は日本文化論として展開する。山崎は個人に着目し、近代社会の「第三段階」とするのである。

「誰でもない人」（貴族社会 nobles）↓「誰でもよい人」（大衆社会 anybody）↓「誰かである人」（いま somebody）と説明し、「規律」「誠実」を「産業社会」の特徴として相対化するが、この動向が日本文化論として論じられる点に、山崎の議論の特徴がある。山崎によって日本文化論に構成的な軸がもち込まれることにもなる。このとき、山崎は肯定的な文脈で日本文化論を唱えており、構成的で肯定的な日本文化論が主張されることとなった。

二 「日本文化史」の推移をめぐって

(1)

主として歴史学によって担われてきた日本文化史は、日本文化論のような現状への直接性を欠いているようにみえる。状況との緊張関係を直接には表明せず、もっぱら過去の叙述として提供する。しかし、歴史家なりの問題意識と工夫がなされてきていることはいうまでもない。

戦後における歴史学の日本文化史の様相を、家永三郎『日本文化史』(岩波書店、一九五九年、第二版一九八二年)に探ってみよう。<sup>2)</sup>

家永は「文化史とは歴史の見方を示すものであって、歴史のうちのある領域を指すものではない」という考え方もある、と述べる。家永には、「文化史学」を念頭におき、西田直二郎らが文化史の名のもとに歴史を恣意的に解釈したという認識がある。文化史を「歴史の見方」とすることに警戒をもつ。そして、西田らの「文化史学」を批判し、文化史をあらためて「領域」とするのである。加えて、「敗戦前の日本」では「日本の国家や文化の特殊性」が「国体の精華」のように「誇称」されてきたが、それは「政治的動機から出た、実質的根拠のない、独りよがりの優越感」にすぎないと、手厳しく斥ける。このとき、家永は日本の「特殊性」は保持したま

まであり、その評価に異議を申し立てているのである。さきの青木のいう「否定的特殊性」に位置し、日本文化の「特殊性」の称揚を批判する。

そして、あらためて文化史の領域というとき、家永は「せまい意味での文化の定義」によるのではなく、ひろく「学問や芸術や宗教や思想・道徳などの領域」を対象とすることを主張する。

文化史が学問・宗教・芸術などの歴史であるならば、日本文化史では、何よりもまず日本人がこれまでどのような内容をもつ学問・宗教・芸術をつくり出してきたかを具体的に明らかにしなければならぬ。<sup>3)</sup> (『日本文化史』)

「世界的・国際的な伝播・交流のなかで発達」という観点のもとで、日本文化史を考察することを図っている。家永は、「文化を、単にでき上がった文化財としてだけでなく、いつもこれをつくり出し、享受する社会または個人との関係において考えること」とし、「つくり出すはたらき」「つくられたもの」「享受するはたらき」に着目する。作品として具体化される文化を、①完成品としてではなく、生成の過程として把握し、②提供する側からだけでなく、享受する側の視点を入れることをあわせいう。動態的に文化を把握しようとする視点がみてとれる。

だが、家永の文化史では、その領域が戦後の常識的な理解で把握されているとともに、「学問」「宗教」「芸術」の範囲が時期的に異なることが理論化されないまま、実体化されている。むしろ、「学問」「宗教」「芸術」という領域の線引き——範囲の推移こそが文化史の考察対象となるはずだが、家永にはそうした関心は見受けられない。加えて、その（流派とは異なる）「型」を抽出することもない。すなわち、家永のいう文化とは、実のところ文化財を扱うということになる。<sup>3)</sup>

『日本文化史』は、江戸期までを主要な対象とし、「原始社会」「古代社会」（律令社会、貴族社会）「封建社会」と時期区分し、それを「成長期」「確立期」「崩壊期」とさらに腑分けする。そして、近代の部分は、「日本の近代化と西洋近代文化の摂取」として概説されるという構成である。この時期区分は、「日本文化史では、日本文化の一貫した伝統やその特色を明らかにしていくことが、だいたいなしごととなろう」という主張と対になり、日本文化の範囲も固定されることとなる。

かくして家永の『日本文化史』においては、文化財の正典（キャンオン）を日本文化として紹介し、その推移をたどることが日本文化史とされ、日本の範囲も現時のものとしてされている。静態的で固定的な文化史ではある。

なお、家永は、文化研究が転回する一九八〇年代の入口に『日本

文化史』第二版を提供した。だが、ここでは大枠は崩さず、目次は変更しないまま、①近代の部分を削除し、②「新史料・新史実の発見と新しい評価の観点からの補足・修正」をおこなった。すなわち、「もとより基本的な日本文化史に対する私の見方に変りはない」とされる。

現在の目で見ると、こうした家永『日本文化史』は日本文化論と接点を有していない。歴史学は、独自にたくさんの部門史とそれを束ねた日本文化史を提供していた。たとえば、『体系日本史叢書』（全二十二巻、山川出版社、一九六四年）に「社会史」「生活史」「産業史」「宗教史」「科学史」「美術史」「芸能史」「思想史」「交通史」の巻がおかれるごとくである。家永の『日本文化史』も同じ構造をもち、部門史の集成と読むこととなる。

こうした歴史学における文化史の位置とその構造は、『近代日本思想史講座』（全八巻、筑摩書房、一九五九—六一年。一冊未刊）『技術の社会史』（全六巻十別巻、有斐閣、一九八二—九〇年）などの試みや史料集としての展開（いくつもの思想大系、文学大系、アンソロジー）がなされるものの、文化の概念を変えたり、その推移を扱ったりといった姿勢がみられないことと同じ位相をもつ。

また、『図説 日本庶民生活史』（全八巻、河出書房新社、一九六一—六二年）、『日本生活文化史』（全十巻、河出書房新社、一九七四—七五年）など、そのあとにつづく「日本文化史」の出版も同様であ

る。文化財を束ね、その通時的紹介をもつばらにすることとなり、文化の概念やありようの認識の転換はともなわない。時期区分、すなわち、文化史的な時代把握も(『日本生活文化史』のばあい)「西洋文明の衝撃」「生活のなかの国家」「市民的生活の展開」「軍国から民主化へ」とされ、オーソドックスである。

文化財の紹介を効果的にするため、これらのシリーズでは、大判、カラーを含む多くの図版が収録されている。なかでも、『図説 日本文化史大系』(全十四巻、小学館、一九五六一―五八年)や『図説 日本文化の歴史』(全十三巻、小学館、一九七九―八一年)は、その代表的なものとなる。これらのシリーズでも、時期区分は「明治」「大正・昭和」「現代」とオーソドックスであり、通史的体裁をとり、あらゆる部門を、図像を多用しながら叙述している。

これらは、戦後の歴史学が、社会経済史・政治史から文化史・生活史へ傾斜していくという歴史学全体の傾向を示しているとともに、高度成長下での経済的な向上に対応した出版という側面ももつ。政治史とそれに組み合わされた社会運動史が軸となっていた歴史学において、かかる文化史のありようは批判性(イデオロギー性)が弱まるものでもあつた。戦後の歴史学のもとで、日本文化史がなかなか大きな地歩を占められない理由もここにある。

このとき、興味深いのは日本文化史の講座として、日本史研究会編『講座日本文化史』(全八巻、三二書房、一九六二―六三年)が編

まれたことである。「寛政―明治初期」(第六巻)、「明治五年―明治末」(第七巻)、「大正―昭和期・戦後」(第八巻)という構成であるが、「下部構造」を重視し、社会経済史に力点を置いていたマルクス主義にもとづく、文化史の通史(階級、文化運動)として異色であつた。

家永の『日本文化史』が、戦後の歴史学の第一潮流Ⅱ「戦後歴史学」と対応するするとき、一九六〇年代以降には、あらたな歴史学に対応する日本文化史が胎動する。そのひとつが、色川大吉『明治の文化』(岩波書店、一九七〇年)であり、色川は「民衆」への着目をおこないながら日本文化史への関心を示す。ひとつの画期が、色川によつてもたらされる。

『明治の文化』は、(外来の)「欧米文化」と(土着の)「民衆文化」に目を配り、民衆文化のなかの「頂点」と「底辺」の相違を指摘する。また(文化史を標榜しつつ)「変革思想」に言及し、秩父事件などの民衆運動に「文字なき人びとの思想・意識」を見出す。さらに「非文化状況」へも議論を及ぼす。風土や民俗に言及し、丸山眞男の批判を通じて「知識階級と民衆との思想形成の質の違い」を論じており、多様な論点と事例とを提供する。

「民衆」「大衆」「人民」「国民」「民族」と、言い方こそ統一されていないが、色川の著作は「一大文化運動としての自由民権運動の昂揚と挫折」を「明治の文化」として描く。文化の概念を、文化財

の集合から一挙に解放し、文化史の概念を大きく開いていった作品である。

中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』（岩波書店、一九六六年）や川田順造『無文字社会の歴史』（岩波書店、一九七六年）、あるいは山口昌男が文化概念を根底から変えていった営みと同じ位相をもち、文化概念を転回し、あらためて日本「文化」のなかで検証するともに、日本「文化史」として叙述する試みであったといえよう。

もつとも、色川は日本を「特殊」の文脈で把握している——日本は「特殊な文化感覚と日本型住民社会と社会意識」をもつとし、次のように述べている。

〔日本の風土は〕思想・文化に抜きがたい固有性をもたらした。それは人種、言語、宗教、衣食住の様式の均質性から、発想様式、美意識、自然観、精神構造にまでおよぶ単一性をもたらしたのである。いかにそれが単一的で均質的であるかは、インド、中国、東南アジアの多民族国家のそれとくらべてみれば、すぐわかることであろう。（『明治の文化』）

この点で、『明治の文化』は、日本文化を特殊な実態をもつ文化と把握していく。「日本」「文化」を「日本文化」とし、かつ近代によって形成された概念として把握せず超歴史的概念とし、日本の

「固有性」として「均質性」「単一性」をみている。

色川が『明治の文化』で試みたことは、たくさんの「民衆」の経験を発掘し束ねる営みであり、それを文化史として描き出すことであった。「他者」の経験を掘り起こし語ることを通じて、色川がその経験を共有し、自己の文化（国民文化）として語るのである。このとき、文化史は、①構造的であり連続的となり（「底辺」「地下水」との語は、色川のキーワードである）、②当事者優位と、（色川が）当事者になりかわって語ることが混然としていく。多様な主体が多様に活動することを叙述し、文化の概念を変えていくことが、同時に遂行される。このことは、文化史と文化論の接点が創りだされることでもあった。

戦後の歴史学の第二潮流——「民衆史研究」をうけた、この日本文化史はゆつくりと日本文化論と接していくようになる。Aを軸にBと接点を有するシリーズ、および、Bを基調としAにも目を配るシリーズを紹介しておこう。

前者は、『明治大正図誌』（全十七巻、一九七八―七九年）である。全体の構成は、『図説年表』（山口修編。以下、（ ）内は編者）、『関東』（色川大吉）、『近畿』（岩井宏美、西川幸治、守谷克久）、『日本海』（鹿野政直）、『海外』（吉田光邦）、『中央道』（飛鳥井雅道）、『北海道』（永井秀夫）、『東北』（色川大吉）、『東海道』（原田勝正、田村貞雄）、『京都』（梅棹忠夫、守谷克久）、『大阪』（岡本良一、守屋毅）、『瀬戸

表1 「シリーズ民間日本学者」ラインナップ

- 『小泉八雲——その日本学』高木大幹（1986年）  
 『石井研堂——庶民派エンサイクロペディストの小伝』山下恒夫（1986年）  
 『出口王仁三郎——屹立するカリスマ』松本健一（1986年）  
 『牧野富太郎——私は草木の精である』渋谷章（1987年）  
 『柳宗悦——美の菩薩』阿満利磨（1987年）  
 『添田啞蟬坊・知道——演歌二代風狂伝』木村聖哉（1987年）  
 『長谷川伸——メリケン波止場の沓掛時次郎』平岡正明（1987年）  
 『辻まこと・父親辻潤——生のスポーツマンシップ』折原脩三（1987年）  
 『今和次郎——その考現学』川添登（1987年）  
 『田村栄太郎——反骨の民間史学者』玉川信明（1987年）  
 『石川三四郎——魂の導師』大原緑峯（1987年）  
 『花田清輝——二十世紀の孤独者』関根弘（1987年）  
 『E. S. モース——〈古き日本〉を伝えた親日科学者』太田雄三（1988年）  
 『伊波月城——琉球の文芸復興を夢みた熱情家』仲程昌徳（1988年）  
 『内村鑑三——偉大なる罪人の生涯』富岡幸一郎（1988年）  
 『保科五無齋——石の狩人』井出孫六（1988年）  
 『小笠原秀実・登——尾張本草学の系譜』八木康敏（1988年）  
 『きだみのる——放浪のエピキュリアン』新藤謙（1988年）  
 『一戸直蔵——野におりた志の人』中山茂（1989年）  
 『夢野久作——迷宮の住人』鶴見俊輔（1989年）  
 『野尻抱影——聞書"星の文人"伝』石田五郎（1989年）  
 『井上剣花坊・鶴彬——川柳革新の旗手たち』坂本幸四郎（1990年）  
 『永井荷風——その反抗と復讐』紀田順一郎（1990年）  
 『B. H. チェンバレン——日欧間の往復運動に生きた世界人』太田雄三（1990年）  
 『H. ノーマン——あるデモクラットのたどった運命』中野利子（1990年）  
 『島木健作——義に飢え渴く者』新保祐司（1990年）  
 『高群逸枝——霊能の女性史』河野信子（1990年）  
 『辰巳浜子——家庭料理を究める』江原恵（1990年）  
 『今村太平——孤高独創の映像評論家』杉山平一（1990年）  
 『猪谷六合雄——人間の原型・合理主義自然人』高田宏（1990年）  
 『暉峻義等——労働科学を創った男』三浦豊彦（1991年）  
 『正岡子規——創造の共同性』坪内稔典（1991年）  
 『黒岩涙香——探偵実話』いいだもも（1992年）  
 『私語り樋口一葉』西川祐子（1992年）  
 『鈴木悦——日本とカナダを結んだジャーナリスト』田村紀雄（1992年）  
 『山崎延吉——農本思想を問い直す』安達生恒（1992年）  
 『三世井上八千代 京舞井上流家元——祇園の女風土記』遠藤保子（1993年）  
 『森銑三——書を読む"野武士"』柳田守（1994年）  
 『吉屋信子——隠れフェミニスト』駒尺喜美（1994年）  
 『竹内好——ある方法の伝記』鶴見俊輔（1995年）  
 『比屋根安定——草分け時代の宗教史家』寺崎暹（1995年）  
 『中井正一——新しい「美学」の試み』木下長宏（1995年）

\* このほか、予告が出されていたものとして、狩野享吉（鈴木正）、梅原北明（阿奈井文彦）、小野圭二郎（吉岡忍）、松岡静雄（鶴見良行）、岸田吟香（中園英助）、内山完造（上野昂志）、V. モライス（伊高浩昭）、長谷川如是閑（山領健二）、呂運享（安宇植）、徳富蘇峰（木村聖哉）、大佛次郎（西川長夫）、福沢諭吉（西川俊作）、金子ふみ子（道浦母都子）、渡辺宗三郎（石川好）、下村湖人（佐高信）、中野重治（杉野要吉）、石川淳（田中優子）、宮本常一（左方郁子）、佐野碩（岡村春彦）、新井奥遠（日向康）、岡田虎二郎（津村喬）、北村喜八（福田善之）、戴季陶（松本英紀）、西村伊作（上笙一郎）、別所梅之助（笠原芳光）、徳田秋声（小沢信男）、坪内逍遙（津野海太郎）、富士川游（樺山紘一）、山本宣治（米本昌平）、坂口安吾（川村湊）がある。（ ）内は執筆予定者名。

内』（大江志乃夫）、『九州』（飛鳥井雅道、原田伴彦）、『東京（一）』  
 （小木新造、前田愛）、『東京（二）』（前田愛、小木新造）、『東京  
 （三）』（芳賀徹、小木新造）、『横浜・神戸』（土方定一、坂本勝比古）  
 となっている。

大判で図説、カラーを含む画像をたつぷりと紹介し、これまでの  
 日本文化史の出版の手法を用いるとともに、「民衆史研究」の成果  
 をもりこんでいく。風土や自然、地域の形成とそこでの主体の形成  
 をさまざまな観点から叙述する。

他方、後者は、民間学の提起と拡大・定着である。鹿野政直・鶴見俊輔・中山茂編『民間学事典』（事項編・人物編、一九九七年）と、「シリーズ民間日本学者」（編者は、鶴見俊輔、中山茂、松本健一）がリポートから、一九八六年より一九九五年まで四十二冊刊行された。

前者は、人びとの営みやありようを、できうるかぎり広汎に、かつ柔軟な評価軸に基づいて汲み上げ、留め置こうとする試みである。日常の「知」であるが、それだけに自覚しにくい「事項」「人物」をひろいあげている。

また、後者は、おおかたの思想史、文学史には登場しにくい人物を自由な書き方で紹介する試みであった。表1にあらわされるように、これまでの歴史書にはみられない名前がならんでいるとともに、副題が（執筆者による）対象者の意味付けや特徴を提示している。こうしたなかに、内村鑑三や福沢諭吉が入り込めば、内村・福沢らの「読み」もまた変わってこよう。なじみの領域区分にはまりきらないような人物や「知」のありようが紹介される。

「民間」とは「在野」であり、「官」から認可されるという権威からは無縁である。また、そのゆえに欧米からの「知」と異なる土着の思想と発想を展開することともなった——このような認識のもと、あらたな日本文化への着目がなされたという。指針となる「民間学」とは、もとは鹿野『近代日本の民間学』（岩波書店、一九八三

年）に由来し（さらにさかのぼれば、鹿野「日本のサブカルチャー研究史」『思想の科学』臨時増刊号、一九七五年）、一九一〇年代から二〇年代にかけての非アカデミーの営みを、通時的に拡大した所産である。在野における「知」のありようを、モノ、コト、そして評伝というスタイルとあわせ、ヒトで括りあげる集成である。『明治大正図誌』も「民間学」も、日本を語るとき、風土や土着性に着目し、「外来」との対比が埋め込まれている。

欧米からくる「知」は抽象的であり、「官」が独占し、さらに制度化を伴うが、それとは対抗的な「在野」の自発的な営みをすくい上げようとする営みとすることができる。「民間学」に触発された、あらたな日本文化の把握であり、一九七〇年代の日本文化研究の一端が提供されている。

このとき、ここにナシヨナリズムが伏在していることは見逃せない。自発的なもの―土着的なもの―民間・在野のものをすくい上げる網は、必然的にナシヨナリズムを伴った。自発的―土着的―民間・在野は、反欧米・反近代とは言わずも、非欧米・非近代の立場をもち、日本に足場を求め、ナシヨナルなものに接近する。一九八〇年代の文化史との差異のひとつが、この点にうかがわれる。

(2)

他方、歴史学における文化の扱われ方を探るとき、戦後四次にわ

表2 『岩波講座 日本歴史』における文化論

第一次 (1962-64年)

- 「近代思想の萌芽」 鹿野政直
- 「文明開化」 大久保利謙
- 「教派神道・キリスト教」 村上重良・高橋昌郎
- 「自由と民権の思想」 後藤靖
- 「天皇制思想の形成」 武田清子
- 「明治20年代の文化」 色川大吉
- 「国民的文化の形成1・2」 飛鳥井雅道・宮川寅雄
- 「大正期の文化」 鶴見俊輔
- \*別巻に史学史、歴史教育、「結婚・恋愛・性」をおく。運動、体制の思想を重視する。

第二次 (1975-77年)

- 「啓蒙思想と文明開化」 ひろたまさき
- 「自由民権運動とその思想」 江村栄一
- 「キリスト教と知識人」 松沢弘陽
- 「天皇制下の民衆と宗教」 安丸良夫
- 「平民主義と国民主義」 植手通有
- 「近代科学技術の導入」 藤井松一
- 「初期社会主義」 飛鳥井雅道
- 「日本ナショナリズム論」 色川大吉
- 「大正デモクラシーの思想と文化」 鹿野政直
- 「マルクス主義と知識人」 生松敬三
- 「社会生活の変化と大衆文化」 山本明

別巻

- 「日本文化論と日本史研究」 井上光貞
- 「国民の歴史意識・歴史像と歴史学」 鹿野政直

研究整理

- 「近代の思想文化」 栄沢幸二
- \*もっぱら史学史、歴史教育および、宗教、技術、運動の思想と文化、大衆文化、歴史意識を扱う。

第三次 (『岩波講座日本通史』1993-96年)

文化論

- 「文明開化」 牧原憲夫
- 「政治的自由主義の挫折」 坂野潤治
- 「自由主義論」 松沢弘陽
- 「戦中・戦後文化論」 赤沢史朗
- 「大衆文化論」 中野収
- 「現代の思想状況」 安丸良夫

その他

たつて刊行された『岩波講座 日本歴史』(第三次は「日本通史」)が、ひとつの手掛かりとなろう。なぜか講座の類では、文化は慣例として巻末におかれるが、各次の岩波講座の巻と目次の構成によつて、文化史の構想——どのような文化把握が、どの時期になされたかがうかがえる。

『岩波講座 日本歴史』での文化史叙述を大づかみにいえば、近代形成期は「啓蒙思想」を軸とし、「自由民権運動」「初期社会主義

運動」を入れ込み、「平民主義」「国粹主義」を扱い、「民本主義」へと至る。「文明開化」と「天皇制」をいまひとつの核とし、一九二〇年代の「大衆文化」に目を配り、近代と現代の思想と文化、運動と社会を把握しようとする。他方、戦時期以降は、思想・文化の項目は極端に少なくなるが、「戦後思想」「戦後文化」として、その後の文化が捉えられるのである。

いささか煩雑だが、近代・現代の日本文化の歴史学的把握の項目

化を知るために、各次の「文化史」部分の目次、および執筆者を表  
2として掲げておこう。<sup>4</sup>

『岩波講座 日本歴史』第一次（一九六二―六四年）、第二次  
（一九七五―七七年）に比し、第三次『岩波講座 日本通史』  
（一九九三―九六年）は文化史を重視し、領域にとどまらず歴史をみ  
る視点にしようと試みるが、第四次（二〇一三―一五年）はまたも  
とに復しており、推移をみせている。『岩波講座 日本通史』にお

- 「民衆運動と社会意識」 鶴巻孝雄
- 「西郷隆盛と西郷伝説」 特論：佐々木克
- 「近代天皇像の展開」 飛鳥井雅道
- 「裏日本」の成立と展開」 特論：古厩忠夫
- 「故郷・離郷・異郷」 岩本由輝
- 「主婦と職業婦人」 米田佐代子
- 「マルクス主義と知識人」 安田常雄
- 「マスメディア論」 特論：山本武利
- 「柳田と折口」 特論：赤坂憲雄
- 「アジアの日本観・日本のアジア観」 内海愛子
- 「戦争と厚生」 特論：小坂富美子
- 「大東亜共栄圏」における日本語」 特：高碓宗司
- 「技術革新」 中岡哲郎
- 「宗教意識の現在」 小沢浩
- 「問われる性役割」 天野正子

\*各巻に「文化論」をおく。文化史的視角からの歴史叙述（あるいは文  
化論的把握）をねらう。「通史」「論説」「特論」と「文化論」の構成。

#### 第四次（2013-15年）

- 「文明開化の時代」 苅部直
- 「教育・教化政策と宗教」 谷川穂
- 「伝統文化の創造と近代天皇制」 高木博志
- 「近代学校教育制度の確立と家族」 小山静子
- 「社会問題の「発生」」 石居人也
- 「戦間期の家族と女性」 小野沢あかね
- 「改造」の時代」 黒川みどり
- 「大衆社会の端緒的形成」 大岡聡
- 「戦争と大衆文化」 高岡裕之
- 「戦後日本の社会運動」 道場親信
- 「戦後史のなかの家族」 田間泰子
- 「メディア社会・消費社会とポピュラーカルチャー」 伊藤公雄

\*基本的に政治史として、歴史をまとめあげようとしている。別巻に、  
史学史（ジェンダー史、国民国家論などをふくむ）が掲げられる。

ける文化論への接近、さらに方法としての文化史の試みはあつたが、  
総じてアカデミズムの歴史学においては、文化史はまだまだ部門史  
（領域・対象）にとどまっていた。全体史としての日本文化史（方法）  
が登場するのは、さきのシリーズ『近代日本の文化史』以降という  
ことになる。

しかし、『岩波講座 日本歴史』に示される日本文化史は、日本  
文化論とは一線を画し、「精神」や「意識」とともに「社会運動」

「地域」、あるいは「天皇制」「差別」、さらに「社会的諸団体」「リーダー」とサブリーダー」「生活」などが文化として抽出され、それらを組み合わせる文化史が叙述—提供されている。

別の角度からいえば、アカデミズムには思想史／文化史／生活史の領域が存在している。これに従ってみると、たとえば色川大吉の軌跡は、思想史（『明治精神史』黄河書店、一九六四年）↓文化史（『明治の文化』岩波書店、一九七〇年）↓生活史・世相史（『昭和史世相編』小学館、一九九〇年）となる。思想史と生活史の接点としての文化史という位置付けがみられ、鹿野政直、安丸良夫、ひろたまささらの「民衆史研究」が、広義の意味で文化史に携わり、文化の概念を広げるとともに、みずからの方法としていったということができる。すでに、色川は、「社会の生活様式として無意識に機能している文化」とも述べていた。

それとともに、内部から日本文化史を引き裂く試みもあつた。たとえば、飛鳥井雅道『近代文化と社会主義』（晶文社、一九七〇年）は「日本帝国主義思想」への関心から、日本文化史を論じていく。飛鳥井は、日清戦争と日露戦争のあいだ（一八九五—一九〇五年）における「社会的高揚」に着目し、民友社左派の社会小説、『万朝報』『二六新報』などの社会改革への参画、そして「自我」——「日本型のブルジョア思想」と「明治社会主義思想」の登場などに着目する。

このとき、飛鳥井はこの「社会的高揚」は「国民文化」に結晶しえず、日露戦争を画期に転換し、ついに「帝国主義的な文化」となり終えることをあきらかにする。「国民的文化を成立させる条件」はあつたが、日露戦争後に「支配者と被支配者の分裂した文化」——「文化の二重構造」を、飛鳥井は指摘するのである。日本文化が「国民文化」として成立せず「帝国主義的な文化」となったことを述べ、日本文化に一石を投じる。これまでの文化史の叙述に対し、亀裂をもち込むのである。

飛鳥井は「文明開化」について、

日本近代化のありかたとその条件を、文明開化ということばに集中して表現される、社会・思想・文化の構造変化のなかで、わたしなりに解きあかそうとする試みである。

（『文明開化』岩波書店、一九八五年）

とも述べるが、日本文化の帝国主義化を、文化史の方法を用いて論述し、均一的な日本文化の把握を内破しようと試みる。

安丸良夫『出口なお』（朝日新聞社、一九七七年）や、ひろたまさき『文明開化と民衆意識』（青木書店、一九八〇年）、あるいは鹿野政直『戦後沖繩の思想像』（朝日新聞社、一九八七年）も、文化史の方法による従来の日本文化史研究の内破であつた。

たとえば、安丸は、民衆宗教の教祖を「通俗道德型」の生活規範から「近代化日本への憤激」へ向かったとし、明確な方法意識により「歴史的なものとしての生の様式の内在的分析」をおこなう。ひろたのばあい、文明の先進と後進、文明と野蛮、文明ゆえの差別などの論点を提示し、「民衆」がもつ三層構造（豪農）「底辺民衆」「奈落と辺境」の民衆を指摘する。「国民化」される「奈落」と「辺境」の民衆を論じ、文明を歴史的な検証の場におき、文化史のあらたな視点を提出した。そして、鹿野も「戦後沖繩」を「本土」（およびアメリカ）との緊張関係で生きた青年群像を軸として考察し、日本文化の一体性なるものに疑義を提出する。

一九七〇年代の文化史は、近代／日本近代／近代化を分節し、生活／運動／思想を、その対象としていった。文化の定義もそれにもない、学問・宗教・芸術（家永）といった古典的な領域から拡大される一方、「知識人と民衆」、さらには（色川による）「非文化状況」の考察もなされる。「一九世紀文化史」（飛鳥井）も、同様の発想による。

だが、このことはナショナルなものへの傾斜と同居している。『日本文化の歴史』（岩波書店、二〇〇〇年）を著した尾藤正英は、

文化とは、さまざまな文化遺産や文化現象そのものを指すのではなく、それらを包括しつつ、歴史的に形成されて来た日本人

の生活や思考の様式の全体を、特にそこに現れた民族としての個性ないし特性に注目して考える意味の概念である。

（『日本文化の歴史』）

という。尾藤はまた、「日本の将来に新しい展望を開く可能性」があるとすれば、「西洋化」の弊害」を見すえ、「西洋化以前の伝統に基づいて、新しい日本のあり方を構想するところから着手しなければならぬのではないか」とした。

旧来の文化の概念を内破する文化史であり、民族としての日本人そのものが構成的であることは意識しつつも、日本・日本文化という枠の構成性にはまでは射程が及ばないようにみえる。ナショナルなものとおわせ、ナショナルなものへの著者たちの関心そのものが文化史の対象とされねばならない。

おわりに

リン・ハント編『文化の新しい歴史学』（*New Cultural History*, 1989）の日本語訳が、岩波書店から刊行されたのは、一九九三年のことである。『文化の新しい歴史学』は、あらたな歴史学の方角を文化史に探り、「転回」をふまえた試みを次々に紹介する。ここでは、さまざまな文化をめぐる現象がテキストとして読み解かれ、国民文化

は解体される。

この議論に学べば、日本文化はひとつのケースとして扱われ、日本文化は、「日本」「文化」となり、あらためて文化史が方法とされ、文化とともに文化史も構成的な認識を踏まえた叙述として再定義されることになる。

他方、この「新しい文化史」の動きと対抗するように、文化論の観点から「転回」を拒絶し、文化をあらためて実体化しうえて、歴史をくろみあげようとする動きもでてくる。本稿冒頭の対抗状況は、かかる事態の所産であった。日本を問題化しつつ、日本文化史を叙述する試みとともに、文化論もあらたな展開をみせている。

こうしたなか、文化論／文化史の関係をあらためて問い、日本／日本文化のみならず「日本」「文化」とその位相を同時に問題化する姿勢が求められよう。素朴なナショナリズムと実証主義にとどまらず、言語論的転回以後の状況を踏まえた「日本論」、「日本文化論」、「日本」「文化」論とをあわせて射程に収めるということである。日本・日本人・日本語・日本文化の恣意的結合の指摘のみならず、日本・日本文化は構成的でありながら、なぜリアリティを持つのかということが問われなければならない状況である。

加えて、文化史が叙述として提供されることを考えれば、あらたな叙述の作法も求められている。メタヒストリーにまで行き着いた史学史は、あらためて叙述の作法と実践を求めている。あらたな胎

動がはじまっている。新しい軍事史、ジェンダー史のあらたな展開、エゴヒストリーや感情史、音楽史の浮上などは、こうした課題への応答であろう。日本研究の幾度目かの大きなうねりが予感される。

注

(1) 以下にとりあげるのは、もっぱら近代日本の文化を論じた戦後の作品となる。歴史学においては、日本文化史の領域は中世史において状況をなしており、林屋辰三郎、北山茂夫、石母田正、網野善彦、黒田俊雄、横井清らをはじめとする作品を多々挙げることができる。また、日本文化史の通史として書かれた、家永三郎『日本文化史』（岩波書店、一九五九年、第二版、一九八二年）、あるいは、尾藤正英『日本文化の歴史』（岩波書店、二〇〇〇年）も近代に比重をおいている。

(2) 歴史学における日本文化史の系譜は連続と続くが、文化史を歴史分析の方法としたのは、いわゆる「文化史学」であり、史学史のなかでの一潮流―範疇とされる。担い手としては、一九一〇～二〇年代の津田左右吉、村岡典嗣、内藤湖南、柳田国男、和辻哲郎らが挙げられる。なかでも、方法に自覚的なのは、西田直二郎『日本文化史序説』（改造社、一九三二年）であり、西田は部分によって全体を見ることを図り、「国民史的自叙伝」を書いた、とされる（北山茂夫）。また、実証主義と文献史学に対する批判の論点、「世界史と国民史の統一」、「歴史を書く立場」の明示と日本精神史への傾斜をもったことも記される（奈良本辰也。いずれも、第一次『岩波講座 日本歴史』別巻所収）。

(3) 通時的な叙述に型を組み合わせた作品として、加藤周一『日本文学史序説』（上下、筑摩書房、一九七五、八〇年）がある。「近代」において、世代に着目するとともに、さらにそこから型を抽出している。

(4) むろん、ここではなにを文化史とみなしたか、という私自身の選択とその基準があわせ問われよう。表2においては妥協的ではあるが、消去法をとり、政治史、経済史、国際関係史という歴史学の主流・主軸以外のものを抽出した。